
バカとテストと召喚獣 ～蒼い瞳の従姉～

G A U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣　　蒼い瞳の従姉　

【Nコード】

N7557X

【作者名】

GAU

【あらすじ】

明久と同じ日同じ時間同じ病院で生まれたイタリア人ハーフの少女、夏目綾香は、その自由奔放且つ傍若無人な性格で彼を振り回す！

双子同然に育った彼と彼女のドタバタコメディー♪

ぶろろーぐ（前書き）

気が付いたら書いてました。

読んでくれる方が楽しんでくれたら幸いです♪

ぶろろーぐ

とある家族向けマンションの一室。

春の陽気にあてられ、その少年は惰眠をむさぼる。

しかし、ベッドの上の盛り上がりは、一人分にしては大きい。

「んん……」

窓から差し込む日差しに、少年が寝返りを打つ。

その鼻腔を、柔らかい匂いがついた。

「ん？ んんん？」

眉根を寄せた少年が身じろぎしようとする、全身が柔らかい何かで締め付けられる。

「んん？ な、なに……」

軽く寝ぼけたまま眼を開いていくと、視界いっぱい金色が広がる。

ぼんやりしながら“それ”へと手を伸ばし、軽く撫でる。

柔らかい金色の手触りは気持ちよく、なんとはなしに撫で続ける。

「ん、ううん……」

不意に気持ち良さげな声が聞こえた。つづけて体にまとわりついた柔らかいものがかしそうにうごめく。

そして、金系の向こうに白い肌が見え、閉じられた眼の長いまつげが揺れた。

「……………」

その“顔”を見た瞬間、少年吉井明久の霞がかかった頭がクリアになっていく。

すると、自分のみぞおちのあたりに二つの柔らかい膨らみを感じとり、意識は一気に覚醒した。

「……………！！」

状況を瞬時に把握したところで、金系の向こうの瞼が開き、蒼い

瞳が表れる。

「……………」

「……………」

数瞬、見つめ合う二人。そして、蒼い瞳の少女が天使のように、ふんわりと笑った。

「おはよ　アッキー♪」

その笑顔に朱を散らす明久。

それを見た瞬間、天使の微笑みが、悪魔の笑いに変化した。

「なーに？　アッキー。おねーさんに欲情した？」

「……おねーさんもなにも同じ年だよね綾香と僕は」

少女、夏目綾香の嫌らしい笑みを見てゲンナリとなる明久。

「そもそも何で綾香が僕のベッドに……」

「あー、抱き枕　明久　が気持ちよさげだったから、つい」

「なんだか別のもののルビに僕の名前が使われた気がするんだけど？」

悪びれることもなくのたまう綾香に、明久がジト目になる。

「またまたそんなこと言つて、おねーさんのおっぱいの感触楽しんでるくせに」

「……否定はしない」

吉井明久と夏目綾香は従姉同士だ。

同じ日同じ病院で同じ時間に生まれた二人は、双子のごとく時間を共有して育った。

ゆえにお互いのことはたいい解つてしまう。

下手に誤魔化そうものなら、綾香はアダルトコードぎりぎりのボデタッチを駆使して明久に吐かせようとするだろう。

そして、このイタリア人ハーフの娘は、明久の反応を見て喜ぶのだ。

故に、素直に吐いた方が実害は少ない。

「ちえー、つまんねーのー」

言いながら身を起こし、ベッドから降りる綾香。

そのまま軽く伸びをしてからあくびを一つ。

その様子を見て嘆息した明久は身を起こし、ハツとして綾香の姿を見た。

いまの綾香は、私立文月学園女子の制服に身を包み、肩をグリグリ回している。たわわに実ったソレのおかげで肩こりがヒドいという話を聞いた気がしたが、今はそんなことはどうでもよかった。

急いで首を巡らし時計を見やる。

「……」

「ん？ アツキー、どしたん？」

時計の短針長針の行方に啞然呆然となる明久。

その様子に綾香が首を傾げる。

「ち……」

「ち？」

「ちこくだーっ!？」

「あ、ほんとだ」

焦った様子の明久にのんびり同意する綾香だった。

ぶろろーぐ（後書き）

いかがでしたか？

まあ、続きを書くかは反響次第かな？
突発ネタですし。

それでは失礼します
♪

だい いちもん♪（前書き）

なにやら思っていたよりずいぶんと反響がありましたので、続きを書いてみましたよ？

読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

だい いちもん♪

校舎へと続く坂道。

両脇を桜で彩られたその道に、鮮やかな金色が踊る。

「疲れた〜、アッキーおんぶ〜」

「もう、しっかり走ってよ綾香」

少しネジの緩そうな少年に手を引かれ、金髪の少女がぶーたれる。
「だいたいバイク通学ダメなのが問題なんだよ〜。二ケツすれば遅刻なんてしなかったのに〜」

ぶつぶつ文句を言いながらも手を引く少年にならって走る。

おかげで癖つ毛の長くて柔らかそうな金髪と、文月学園指定のブレザーを内側から盛り上げるふくらみと、腰回りを覆うスカートが上下に揺れていた。

「どっちにしたって僕を抱き枕にして寝ちゃった時点でアウトだったと思うよ」

苦笑いする少年、吉井明久にうながされ、仕方無しに足を早める少女、夏目綾香。

唇をとんがらかせながら明久の後頭部をにらみつける。

「むー、アッキーのくせに生意気な……とうっ」

っと楽しげなかけ声が響いて明久の背中に衝撃が走り、少女の柔らかい体がぶつかってきた。

「わわっ?!」

思わぬ衝撃に驚いて声を上げるも彼女の体をしっかりと支えてみせる明久。彼の背中に笑顔でおぶさった綾香は身を起こしてご満悦だ。
「らつくちゃん いっけー明久号〜」

元気良く右手を突き出した彼女に対し、深々とため息を付いた明久は、彼女を支え直してから軽く走り出した。

どちらかといえば細身な明久だが、その体はきっちり鍛え上げら

れていた。

幼い頃から綾香と一緒に、サバイバル訓練が趣味だという彼女の父親の訓練に付き合わされた結果だ。

綾香はそんな明久の首に手を回し、彼の背中に体を預ける。

彼が坂道を上りきるまでの、わずかな間、綾香は桜を楽しむ。

明久が、足取りも息づかいも乱れぬまま坂を上りきると、そこには浅黒い肌の巖のごとき漢が仁王立ちしていた。

「遅刻だ。吉井に夏目」

「あ、鉄じ……じゃなくて、西村先生。お早うございます」

「あー♪ てっちゃんだー♪ おっはようん」

明久は軽く会釈し、綾香は明久におぶさったまま身体を目一杯伸ばしながら右手を大きく振った。

その様子にため息をつく西村教諭。

「はあ、おまえ達は……普通に『お早うございます』じゃないだろう。それから夏目。おまえは教師に対してフレンドリー過ぎだ」

「はあ、じゃあ……今日も肌が黒いですね？」

「だねー♪ 今日もいい感じに暑苦しいぞ」

明久が首を傾げながら言う真上で、綾香が片目をつむってペロリと舌を出しながらサムズアップする。

「お前ら……遅刻の謝罪より俺の肌の色や暑苦しさ……の方が重要なのか？」

「あ！ そっちでしたか。すいません」

「あたし的には重要かな？」

謝る明久に、楽しい綾香を見て嘆息する西村教諭。

「とにかく受け取れ」

そう言っただけで差し出してきたのは二枚の封筒。

それを綾香が受け取り、明久の背から飛び降りると、自分のものと一緒に彼宛の封筒もさっさと破り開ける。

「って?! ちょ!?! ま?!」

流れるような彼女の行動に、焦る明久。

「アツキーのクラスはつと……へえ……ほお……ふう〜ん♪」

明久に見せないように中身を見てにんまり笑う綾香。

「ちよつと返してよ!」

「や〜だよ〜ん ♪」

明久は自分のクラスが書かれた紙を綾香から取り返そうと掴みかかるが、彼女は楽しそうに逃げ回る。

それが少し続いたところで……。

重いものが石に落とされたような重量感あふれる音がふたつ響く。

西村教諭の拳が二人の頭を痛打した音だ。

「まったくいい加減にせんか。とつと自分の教室に行け」

呆れたような声を出す西村。その足下で頭を押さえてうずくまる二人。

そして、綾香が痛みのおまり取り落とした紙には……。

『吉井明久…… Fクラス』

『夏目綾香…… Fクラス』

ふたりの学園最低クラスでの生活が始まった。

だい いちもん ♪ (後書き)

いかがでしたか？

普段書いてる分量より短い感じですが、テンポ良く行きたいなと思っております ♪

だいにもん？（前書き）

さて、『だいにもん？』更新となります♪
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです♪

だいにもん？

「おー　でっかい教室だー」

「……うん。ばかデカい教室だね」

去年は足を踏み入れなかった三階。

そこで目の当たりにしたのは巨大な教室だ。

「おー　すっげーぞアツキー！　個人エアコンや冷蔵庫までついでる！」

「なんかもう高級ホテルだね……」

目をキラキラさせてる綾香に対し、明久はちょっと引いてる感じだ。

「あ！　優子だ　おーい、　ゆーこー」

豪華な教室の廊下側の窓から中を覗いていた綾香は知り合いを見つけた喜びに、体をいっぱいに伸ばして両手を振る。

それに気づいた眼鏡にボブカットの少女は不思議そうな顔になり、ボーイッシュなショートヘアの緑髪の少女は面白そうな表情となる。

そして綾香の目当ての少女は、彼女を一瞥して、無視した。

「あつれー？　気づかないのかなー？」

目当ての少女の様子に綾香は首を傾げる。

「……　なんか注目されてるね綾香」

「ん？　別にいいじゃん？　はあ。じゃ、教室行こうか」

言うが早いか明久の手を取り歩き始める。

そんな二人を鋭く見つめる二対の視線に気づかずに。

三階、旧校舎部。明久と綾香は連れだってその古ぼけた……いやさ廃屋のような教室の前に立った。

「すっげー。きつとこの教室崩れるぞ？ アツキー」

先ほど同様、目を輝かせる綾香。対して明久は顔をひきつらせるばかりだ。

「ま、まあ中はマシかもしれないしね」

おのれに言い聞かせるようにつぶやく明久。

「なあなあアツキー　どんな奴がいるんだろうな」

言いながら綾香は明久を引っ張りながら戸を開けた。

「早く座れウジ虫野……ばぐればぐらしゃっ?！」

開口一番罵倒を口にした赤い髪をツンツンに立てた少年の顔面に、きれいに揃えられた白い両足が突き刺さり、吹き飛ばされる。

綾香がショートダッシュからひねりを加えたドロップキックを決めたのだ。

ちなみにスカートを太股で挟んでめくれないようにしているが、瞬時にベストポジションを確保した小柄な少年がシャッターを切っていた。

が。

着地した綾香がにんまり笑う。

「……………ま、まさか?！」

「そうだよ？　康太。あたしはちゃんとスパッツ履いてるから」
ぴらりとスカートをめくって見せる綾香に鼻血を噴出する小柄な少年。

「……………くっ。スパッツを履いていながらもあたかも履いていないようにガードして見せるとは……………不覚……………」

そのまま力尽きる、康太と呼ばれた少年。

一方、明久は綾香のロケットキックを食らった赤毛の少年のところに近づくと、足先で彼をつついた。

「おーい、雄二?　生きてるか?」

「ぐ……………あ、明久か……………いたい何が……………」

頭を振りながら身を起こした、雄二と呼ばれる少年。

その顔面には、しっかりと綾香の上靴の底の模様が刻まれている。

「綾香の全力ロケットキックを食らったんだよ。あれ、地味にひねりまで加えてるから威力あるんだよね」

「……綾香？ アイツはBクラスかAクラスだろ？ なんでFにいるんだ？」

頭がはつきりしてきた雄二は、クラスに思いもしない人間がいたことに驚く。

「あー、うん。綾香、途中退席したからね。点数が無いんだよ」

雄二の質問に顔をしかめながら答える明久。

「あー面白かった あれ？ 雄二じゃん。どったの」

向こうで康太をイジって遊んでいた綾香がやってきてそうのたまう。

「てめえに蹴り飛ばされたんだよ！ このエセ外人！」

「あー。さっきの雄二だったんだ。ウジ虫呼ばわりされたから反射的に蹴ったんだけど、雄二ならいつか」

花が咲くように笑う綾香。そのまま明久の腕をとって歩き出す。

「アッキー、こっちで一緒に座ろうぜ」

周囲から明久に向けられる殺気と嫉妬の視線を気にもせず、明久と腕を組むようにしながら教室の後ろの方へ引っ張っていく。

畳敷きにちゃぶ台という、本来教室としてあり得ない環境も気にしない綾香。

果たして彼女はこのおんぼろ教室で、どんな騒動を引き起こすのか？

だいにもん？（後書き）

いかがでしたか？

基本自由な綾香の活躍は、まだまだこれからですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7557x/>

バカとテストと召喚獣 ~ 蒼い瞳の従姉 ~

2011年10月22日08時03分発行